自然体験、交流会による古民家を居場所とした孤独・孤立対策事業

特定非営利活動法人
棚田LOVERS

兵庫県市川町、姫路市

取組のかたち

自然体験活動を通じた居場所づくりや
地域交流イベント
訪問・対話型の普及啓発活動

届けたい人たち

農村・都市部で孤独や不安を感じている親子
地域とのつながりが希薄に
なっている中高年・高齢者
自然体験を通じて人と関わりたい人

私たちの軌跡

私たちは、棚田や里山、古民家といった地域資源を活かし、自然体験や農的な暮らしを通じて、人と人、人と地域がつながる場づくりに取り組んできた団体である。これまで、農薬や化学肥料に頼らないお米を育てる体験、川遊びや草木染めなどの自然体験、地域住民や子どもたちが気軽に集える居場所づくりを継続的に行ってきた。活動を通じて大切にしてきたのは、「特別な支援の場」ではなく、日常の延長線上にある、自然に人が集い、会話が生まれる関係性である。農村部・都市部を問わず、孤独や不安を抱えた人が、安心して立ち寄れる関係づくりを目指している。

私たちの新たな取組

本事業では、農村部および都市部における孤独・孤立の予防を目的に、自然体験と交流を組み合わせた取組を実施した。具体的には、兵庫県神崎郡市川町の棚田・古民家・川を拠点に、農薬・化学肥料を使わない米や野菜を育てる体験、川遊び体験、日々の暮らしと自然を結びつける草木染め体験を実施した。また、自治会と共催した地域交流会の開催や、姫路市の商店街において会話・交流・普及啓発活動を行い、農村部と都市部の双方で、人と人が出会い、つながるきっかけづくりを行った。これらの取組を、単発で終わらせず、参加者同士が継続的につながれるよう、LINEグループ等を活用した関係づくりも併せて行っている。

継続は力なり

自然体験や居場所づくりは、一度実施しただけでは、孤独や不安を抱える人の状況を大きく変えることは難しい。そのため、無理のない規模で「続けられる形」を大切にしながら、活動を長期視点のもと19年間にわたり積み重ねてきた。同じ場所で、同じように人を迎え入れ、自然の中で一緒に作業し、食べ、語り合う時間を繰り返すことで、参加者が「また行ってもいい」と感じられる安心感のある関係性が育まれている。また、地域住民や自治会、行政との信頼関係が築かれ、共催や広報協力などの連携につながっている。継続すること自体が、孤独・孤立を防ぐ力になるという考えのもと、これからも地域に根ざした取組を積み重ねていく。

取組の成果

自然体験を通じて、参加者同士の会話や交流が自然に生まれ、日常生活の悩みや不安を共有しやすい関係性が育まれた。特に、「自然いっぱいの地域で楽しい時間を過ごさせていただきました」、「自然の恵みがすばらしくて、お昼ごはんは贅沢でした」といった声が聞かれ、孤独感の緩和や心理的な安心感につながっている。また、行政機関や地域団体との連携が進み、広報協力や情報共有を通じて、取組の認知拡大と参加者の広がりにもつながった。今後は、これまでに培った関係性とノウハウを活かし、より多様な人が参加できる形で取組を継続・発展させ、孤独・孤立対策としての実践を地域に根付かせていくことを目標としている。

団体概要

団体名	NPO 法人棚田 LOVERS
代表者	永菅千鶴子
設立年月	2010年3月
住所	兵庫県神崎郡市川町谷915
ホームページ	https://tanadalove.com/
メッセージ	大自然の中で、多世代で交流する中で、孤独・孤立予防を19年間継続しています

取組の様子

川遊び体験体験の写真

交流企画の様子

自治会と共催の交流企画の棚田での集合写真

モノコトづくり体験プログラム

伝承鳩

和歌山県

取組のかたち

地域の中で役割を育み、モノ・コトづくりを通じて
多世代がつながる交流拠点の創出

届けたい人たち

10代～20代の若者
居場所を求める人
なにかチャレンジしたい人

私たちの軌跡

移住者受け入れ協議会として始まった伝承鳩では、社会教育の基本理念である「人づくり・地域づくり・つながりづくり」を軸に、大人が楽しみ自己表現できるまちづくり、地域の力を高め移住促進につなげることを目的に地域おこし協力隊などと連携し、地域の中で様々なイベントを開催している。また、こども・若者が多様な大人に出会い、多様な選択肢に出会ってもらいたいとの思いから、湯浅駅前を地域のプラットフォームにするべく「湯浅駅前コミュニティ屋台プロジェクト」と称する社会実験を実施。行き場の少ない学生たちが気軽に立ち寄り、地域の大人と出会う場の提供などを行ってきた。

私たちの新たな取組

地域の交流拠点となる民間施設「複合私設（はぐくみ中）」を拠点に、10代～20代を対象とした「実践型モノコトづくり体験プログラム」を展開し、若者にとってのサードプレイスの形成を目指した。空き家等の活用を見据えた拠点づくりの一環として、実際に空き家で空間づくりやものづくりを通じて、解体や壁づくりなどの建築や多様な仕事を体験しながら、多世代のつながりを育んだ。あわせて、定期的なごはん会を通じて孤食問題にアプローチし、関係性を育みながら居場所づくりを行った。さらに、モノづくりの次のフェーズとして、若者の「やってみたい」を形にする企画やイベントを実施し、地域の中で役割を持つ経験を育んだ。

世代をこえた交流を生み出す仕掛け

多様な世代が参加しやすいイベントとして、工事中の現場を活かし、室内流しそうめん＆壁に落書きをする会を実施。高校生と小学生が並び絵を描き、大人がそうめんを流し、中学生と高校生がそのサポートを行い、こどもたちが自由に食べる。自然と会話が生まれ、地域の中で顔見知りが増えるきっかけとなった。さらに、短期間に様々なイベントを実施し、一緒に作業することで、大人が若者に教えるだけでなく、若者が大人に教えるような関係性も見受けられた。こういった多様な世代が参加するイベントにおいて、日常と違った役割を持つことで新たな交流が生まれている。

一人ひとりの想いが動き出す場に

本プログラムでは、工具の使い方講座、大工仕事体験が終了後、「自分たちでつくった場所」で「自分たちがやってみたいこと」に挑戦した。社会との接点を増やし、役割を持って関わる体験を積むことを前提にし実施していくことから、参加する若者たちと対話の時間を多く設け、大人が楽しそうにする姿や妄想する姿を見せ「言ってみてもいいかも」と若者たちが好きなことや、得意なことで主体的、継続的に関わるきっかけをつくった。一人では難しくとも、共にミーティングを重ね、責任感の共有と、ワクワクする気持ちのまま実施できるように伴走することで、想いをカタチにしていく「コトづくりイベント」を実施することができた。

取組の成果

8月から11月にかけて実施した「モノづくりワークショップ」（ごはん会等含む）全17回には、若者延べ88名、大人や10歳以下のこどもを含む延べ180名が参加し、多世代が関わる場を継続的に創出した。これらの取り組みをきっかけに、12月から1月にかけて高校生・大学生が主体となったイベントを計3回開催し、計45名が参加するなど、若者主体の活動へと発展した。さらに、「複合私設（はぐくみ中）」（※施設名）は高校生が継続的に集う居場所となり、参加者同士のつながりから新たにまちづくり団体が立ち上がるなど、地域における担い手の育成という成果が生まれている。

団体概要

団体名	伝承鳩
代表者	井上　信太郎
設立年月	2020年4月1日
住所	和歌山県有田郡湯浅町湯浅844-5
ホームページ	https://www.instagram.com/denshoubato.yuasa/
メッセージ	伝承鳩は、また帰ってきたくなる湯浅を目指し、帰巣本能を掻き立てるような場所やイベントをつくっています。若者の未来が明るくなるきっかけをさらに増やしていきます。

取組の様子

ひきこもりの状態にある方等の就労体験事業

社会福祉法人
鳥取県社会福祉協議会

鳥取県

取組のかたち

社会とのつながり、居場所づくり

届けたい人たち

様々な理由によってひきこもりの状態や
就労への意欲が低下している状態の方々

私たちの軌跡

えんくるり事業
県内47の社会福祉法人が参画し連携しながら、地域における生活課題の解決に向けて取り組んでいる事業。公的な制度・サービスでは対応できない生活のしづらさを抱えている方などへ相談・支援や必要とされる社会資源開発（こども食堂・子ども服リユース事業）を行っている。既存の制度では支援する手段がなく、制度の狭間で経済的に緊急・逼迫した状況にある方に一定の生活の安定が見込めるよう、迅速に経済的援助（現物給付）による支援を行うなど、地域での自立した生活を目指せるよう支援している。

私たちの新たな取組

本事業は、ひきこもり状態にある方や就労意欲が低下している方々の社会参加を促すため、一人ひとりの状況に寄り添った継続的な体験支援を行うものである。最大の特徴は、体験期間に制限を設けないことで精神的な負担を軽減している点にある。これにより「階段状」ではなく、体験者に寄り添ったペースでの「スロープ状」のステップアップ支援が可能となっている。緩やかな他者との交流を通じて役割の創出や自信と社会性の回復を支援し、地域社会とのつながりを再構築する。さらに、県内の社会福祉法人や関係機関を対象とした「地域貢献セミナー」を開催し、受入施設の拡大と支援ネットワークの強化に努めている。

見つけた私の居場所

ひきこもり状態にあり社会との接点を失っていた方が、本事業での就労体験を通じ多様な人々と関わる中で、「お世話になった方々へ恩返しをしたい」という他者を思いやる前向きな感情が芽生えた。具体的には、本事業の農作業体験で自身が育てた野菜を、「お世話になった方々に振る舞いたい」と自ら提案。体験者が主体となって「収穫祭」を開催することとなった。
これは、体験者が他者の存在を肯定的に捉え、その場所を「安心できる居場所」として認識した証拠である。かつての孤立した状態から脱し、新たな居場所と役割を見出したと言える。

取組の成果

体験者が「支援を受ける側」から、自ら動き出す「主体」へと変化した。30年近くひきこもり状態にあった方が、体験を通じて社会性を回復し、自発的に職場見学等へ申し込むに至った事例がある。この方は人生で卒業式を経験したことがなく、就労体験施設で初めて『出会いと別れ』を体験したと語っており、本事業が社会経験の空白を補う貴重な場にもなっていることが示された。また、既存の体験者が新人を自発的にサポートする姿も見られ、体験者同士が役割を持ち助け合える「コミュニティ」としても機能している。他者との緩やかな交流により、社会性を再構築し自らの意思で歩み出すための基盤形成に役立っている。

団体概要

団体名	社会福祉法人 鳥取県社会福祉協議会
代表者	中西　眞治
設立年月	1955年10月
住所	鳥取県鳥取市伏野1729−5　鳥取県立福祉人材研修センター内
ホームページ	https://www.tottori-wel.or.jp/
メッセージ	地域に暮らすすべての方が自分らしく働き、暮らし続けることのできる環境づくりを目指して事業の展開を図りたいと考えています。

取組の様子

地域に潜在するスペースを利用した居場所づくりと効果

鳥取医療生活協同組合
健康まちづくり部

鳥取県鳥取市

取組のかたち

居場所づくり

届けたい人たち

多世代

私たちの軌跡

私たちは、鳥取県の中部・東部地域を中心に、組合員の健康づくりや居場所（以下：たまり場）づくり、たすけあい活動の支援に取り組んでいる。具体的には、保健予防活動として血圧測定などの健康チェックを行ったり、がん検診受診の呼びかけを行っている。また、健康に関することだけでなく、ボランティア活動や社会保障、平和に関する学習会も開催しており、各分野の講師を招いて学びの場を提供している。さらに、地域の他団体と連携して「食料無料市」を開催し、病院にかかりたくても行けない方や、生活に困っている方々とつながり、寄り添いながら支援を行っている。

私たちの新たな取組

昨年度、当生協の4つのたまり場にアンケート調査を実施し、通う前と後の心身の変化を検証した。アンケート結果より、うつ傾向の減少など心の健康への効果が示唆され、たまり場が単なる交流の場にとどまらず、参加者の心に良い影響を与えている可能性があることがわかった。今回、5つ目のたまり場が出来るにあたって、アンケート調査の他に、アンケート結果を活かしたチラシ作りやイベント、移動手段についても検討を行った。

立ちはだかった壁と、乗り越えた日々

2025年7月、鳥取市青谷町に「たまり場 みんなの広場」を開設し、地域住民がいつでも立ち寄れる居場所をつくった。しかし猛暑や周知不足などで、利用者の増加にはつながらなかった。そこで、室内の暑さ対策としてシェードを設置し、大通り沿いの立地を活かしてのぼり旗やカフェ看板を設置。入りやすい雰囲気づくりに努めた。また、開所日や催し内容を記載したチラシを配布し、地域への情報発信を強化した。移動手段については、バス停が近く車での来所も可能な立地だが、車がない方やバス停までの移動が難しい方への配慮は十分に検討できなかった。買い物など日常の移動も含め、今後は地域の実情把握が必要である。

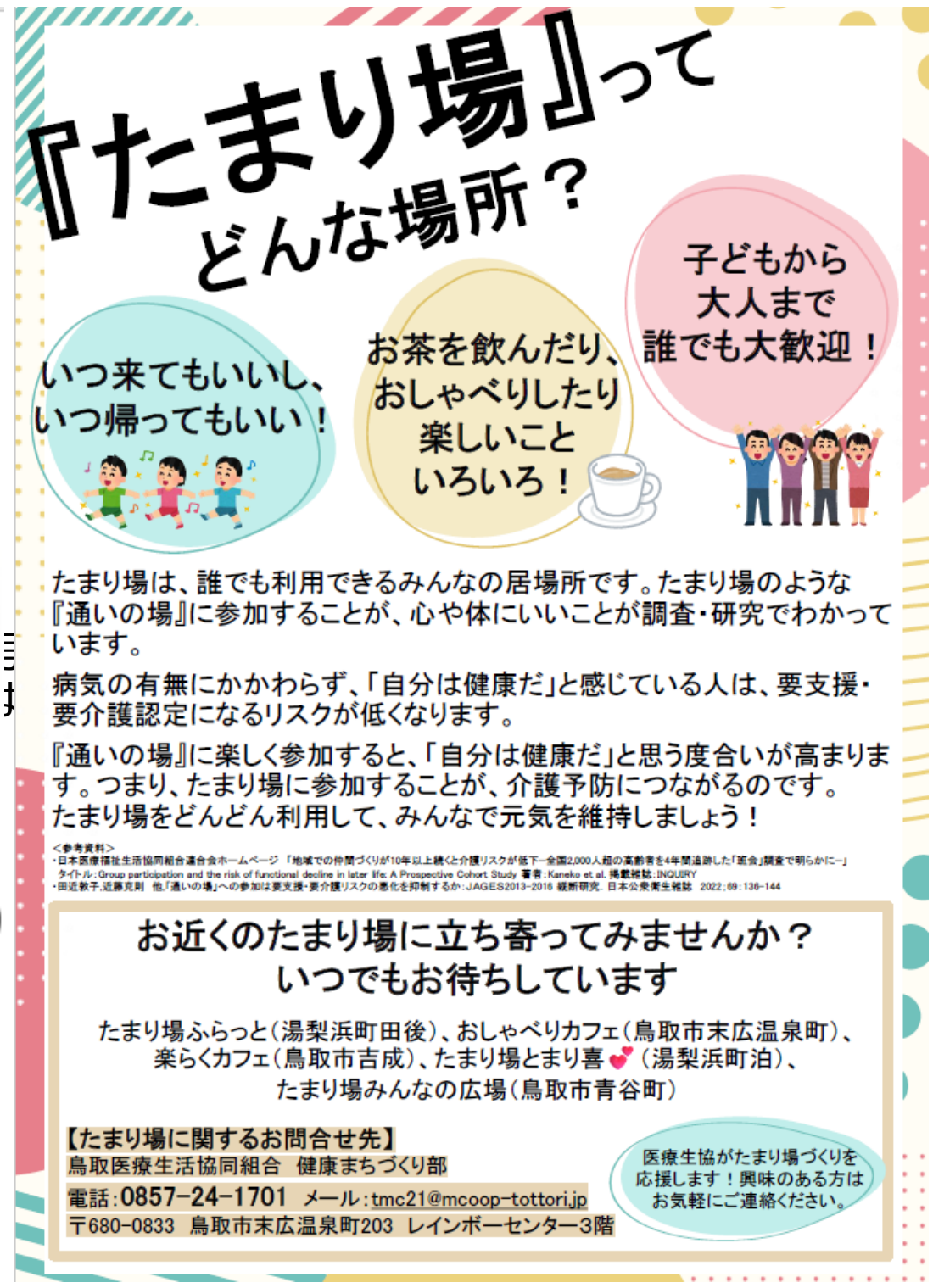
取組の成果

上記の工夫により、徐々に地域住民の関心が高まり、来訪者数も増加。現在では、週3日の開所日におおよそ10名程度の利用がある。2025年12月8日に開催した「ギター演奏会とフレイル予防体操」には約30名が参加し、手作りの豚汁やおにぎりも振る舞われ、にぎわいのある催しとなった。普段は定期的に来所していない住民の参加も見られ、たまり場の周知に大きく寄与した。また、作成したチラシの裏面には「たまり場の効果」や、医療生協による支援の趣旨を記載し、青谷町総合支所や和紙工房などに設置。今後も地域への周知を進めながら、たまり場の拡充を目指していく。

団体概要

団体名	鳥取医療生活協同組合
代表者	組合長理事　竹内　勤
設立年月	1951年　7月
住所	鳥取県鳥取市末広温泉町203
ホームページ	https://www.mcoop-tottori.jp/
メッセージ	引き続き、地域の声や力を活かした、孤独・孤立対策を行っていく。

取組の様子



↑作成したチラシ

周囲の大人に理解され受け入れられる実感を生きる力に変える事業

特定非営利活動法人
ピアサポートつむぎ

鳥取県倉吉市、琴浦町、北栄町、湯梨浜町、三朝町

取組のかたち

家族や親子の関係を整え、家庭での安心できる居場所を取り戻しながら、本人の自尊心を育て人と安心して関われる土台を作る心理的支援

届けたい人たち

不登校・ひきこもり・発達障がいなどの困り感のある子どもや若者と、その家族

私たちの軌跡

不登校やひきこもり、発達障害などの困りごとを抱える子ども・若者と、その家族や支援者に対し、当事者の立場に立った居場所づくりと相談支援を行っている。安心して過ごし、話ができる場を提供するとともに、地域の理解を深めるための啓発活動や、居場所を活かした情報交換や学びの機会を設けている。あわせて、制度のはざまで支援につながりにくい方や孤立している方への相談支援を行い、調理、折り紙、手芸、科学遊びなど、利用者のニーズに応じた活動を通して、子どもや若者、その家族が地域で孤立せず、安心して暮らせる社会の実現を目指して活動している。

私たちの新たな取組

いつでも相談できる常設の居場所を基盤に、親、祖父母、父親、当事者本人など立場別のピアサポートを行い、「自分だけではない」と感じられる安心感と人との繋がりを生み出す。経験をもつ先輩当事者の関わりにより、参加者が将来の姿を具体的に思い描けるようになる。障害理解や受容に関する講座やペアレントトレーニングを通して家族が関わり方を見直し、親子・家族関係の改善につなげたり、当事者が苦手な場面でも対応できた経験を重ね、受け入れられる体験を通して自己肯定感や有用感を高め、福祉・教育・行政・地域と連携し支援が途切れにくい環境を作るため担当者交流を行っている。

この取組が生まれた“はじまりの物語”

相談者には、地域で生活する意欲や力を失い心が弱っている青年たちがいる。彼らは家族と同じ家に暮らしていても居場所を感じられず、部屋に閉じこもったり家族と顔を合わせないよう時間をずらしたりしながら孤立している。家を出て一人で暮らす人もいれば、外に出られずにいる人もいる。共通して語られるのは、家族に理解されず無理をして合わせてきた過去のつらさである。本活動を通して、親とは異なる特性や個性が家族に受け止められることで、親子関係の修復や再構築につながり、家庭での居場所が生まれ、それが地域で孤立せずに生活するための基礎づくりになるのでは？と考えている。

一人ひとりの想いが動き出す場に

本人への支援だけでなく家族の困り感にも丁寧に向き合ってきた。多くは家族の相談から始まり、勉強会や対話を重ねる中で家族の受け止め方が変化している。その変化に本人が気づき、家族が信頼している相談先として安心感が生まれ、本人も一緒に訪れるようになる。本人と会えた際は、ペースやタイミングを尊重し、言葉を最小限にしながら、来てくれたこと自体を大切に受け止めている。穏やかな時間を重ねる中で対話が生まれ、他者との関わりや興味のある活動へと広がり、イベントやボランティアなど次の一歩に繋がる。家族と本人双方の変化が相乗的に社会参加の機会を生み出している。

取組の成果

祖父母の会、父の会、本人の会、母親の会、ペアレントトレーニング、専門家による講演会や座談会に加え、今年度はソーシャルスキルトレーニングの要素を取り入れ、参加者の趣味や興味に合わせたテーマの座談会や学びの困難さに着目した学習支援にも取り組んだ。安心して参加できる場を重ねることで、また参加したい、何か役に立つことをしてみたいといった前向きな気持ちが生まれ次の行動につながる様子も見られた。また、先進地視察や日々の支援を通して得た学びを生かし、孤立しがちな家族や本人が社会と繋がり、地域で安心して暮らせるよう今後も関係機関と連携しながら活動を発展させていきたいと考えている。

団体概要

団体名	特定非営利活動法人 ピアサポートつむぎ
代表者	理事長　河本　純子
設立年月	2022年3月
住所	鳥取県倉吉市小田　79-15
ホームページ	https://sites.google.com/view/npo-tsumugi
メッセージ	同じ体験をした人からの共感や支援は、窓口での相談とは違い、気持ちに寄り添ってもらえる安心感があり、将来の見通しも持てるようになります。 みなさんの地元にもピアサポートの活動が広がりますように！

取組の様子

レジリエンスを支える商店街まるごとフリースクール

一般社団法人
SGSG

岡山県岡山市

取組のかたち

商店街全体を「居場所」とする取り組み

届けたい人たち

中学生・高校生

私たちの軌跡

一般社団法人SGSGは、岡山市北区・奉還町商店街を拠点に、中高生を中心としたユース世代の孤独・孤立の予防を目的とした、常設型の居場所づくりと伴走支援に継続的に取り組んできた。
当団体の活動の特徴は、特定の困難を抱える子どもだけを対象とするのではなく、「誰でも立ち寄れる」「目的がなくても滞在できる」場を日常的に開いている点にある。民設民営ユースセンター「奉還町ユースセンター」を中心に、学習支援、体験活動、イベント、対話の場などを通じて、若者が地域や他者とゆるやかにつながり続けられる環境を整えている。

私たちの新たな取組

本事業は、地域における中高生の孤独・孤立を未然に防ぐことを目的として、奉還町商店街を拠点に、商店街全体を活用した常設型の居場所づくりを行っていた。既存のユースセンターに加え、新たな拠点を整備し、学校や家庭とは異なる「第3の居場所」を日常的に開放した。週3日の学習支援や夜間フリースクールの運営、大学生による中高生向けカフェの実施に加え、体験型プログラムや商店街イベントを通じて、若者と地域が自然につながる機会を創出した。また、ユースワーカーが伴走し、継続的な関係形成を図ることで、孤独・孤立の予防につなげる取組とした。

共に進む仲間を作るための工夫

本事業では、特定の団体のみで支援を完結させるのではなく、地域全体で若者を支える体制づくりを重視した。商店街や大学生、専門学校生を単なる協力者として位置づけるのではなく、企画段階から関わってもらうことで、中高生と自然な関係性が生まれるよう工夫した。また、学校や行政、地域団体との間で日常的な情報共有を行い、困りごとが顕在化する前からつながることができる関係づくりを心がけた。更には、若者が支援を受けるハードルを下げるために、支援の入口を一つに限定せず、複数の関わり方を用意することで、重層的な連携体制の構築を図った。

取組の成果

本事業により、奉還町商店街を拠点とした常設型の居場所が定着した。週3日の学習支援や夜間フリースクール、大学生による中高生向けカフェを継続的に実施し、延べ多数の中高生が日常的に参加した。ボイストレーニング体験や起業体験などの体験型プログラムを複数回実施し、各回数名から十名程度が参加した。また、中高生主体の商店街イベントには2日間で約250名が来場し、地域とのつながりが広がった。対話型企画「奉還町クロストーク」では高校生と地域の大人が参加し、世代を越えた関係性が形成された。今後は連携主体を拡大し、商店街全体で若者を支えるモデルとしての発展を目指している。

団体概要

団体名	一般社団法人 SGSG
代表者	野村 泰介
設立年月	2017年4月
住所	岡山県岡山市北区奉還町3-1-30
ホームページ	https://www.sgsg.work/
メッセージ	JR岡山駅近くの奉還町商店街を舞台に、中高生が学び・遊び・挑戦できる日常を地域とともにつくる団体です。居場所づくりから学習支援、体験活動まで、若者の「やってみたい」を起点に多様な人と場をつなげています。

取組の様子

◆SGSGの施設による学習・体験機会の創出

中学生対象の無料学習支援

ボイストレーニング体験

中高生対象の音楽練習会

◆奉還町商店街との連携イベント

奉還町クロストーク
（商店街の大人と中高生の交流を目的としたトーク会）

商店街イベントにて、中学生バンドの発表会を実施

夏休み限定、東京のインフルエンサーにプロデュースしてもらいポップアップカフェを運営

コミュニティカフェの集いを社会的コミュニティへ繋げる試み

特定非営利活動法人
風の家

広島県広島市

取組のかたち

夜間・早朝のコミュニティカフェの運営

届けたい人たち

生活に困窮している方
犯罪歴のある方

私たちの軌跡

私たちは、矯正施設から出所したものの、頼れる先もないままに社会に戻ることを強いられている方々がいることを知り、そうした人にこそ支援を提供し、彼らの再犯を防ぎ健全な形で生きていくことを支えたいと考え、団体を設立した。当団体では、刑余者、生活困窮者を主に施設で保護し、衣食住を提供し、彼らの自立を支える活動を行っている。
当初はアパートの一室という小さな形でスタートした団体が、現在では建物を一棟借り受けて施設を運営するまでとなっている。

私たちの新たな取組

対象者を施設で保護し、自立した後も、彼らの苦悩や生きづらさそのものは終わっていない。彼らは時に退所後においても施設へ来訪することがある。きっかけは日々の悩みの相談であったり、社会に出ても一人であることから寂しさが根本にあることも少なくない。
そうした方々に対して、なるべく長い時間で来訪を受け付け、彼らの居場所を作りたいと考えた。昨年度より開催するコミュニティカフェでは、少しずつ人が集まり、そこで談笑できる空間を作ることが出来ている。本年度はそうしてできたコミュティを外へと広げていきたいと考え、「地域」との繋がりを模索した。

この取組が生まれた“はじまりの物語”

当施設で関わる利用者のほとんどは、家族や友人との繋がりを失い、社会との関わりを持っていない状態である。そうした中、ある若い利用者が当施設に保護され支援を受けていた。無事に一人暮らしができる家が見つかり、退所が近づいていた頃、不意に年齢の近い職員を呼び留め、「ともだちになってください」と声をかけてきた。その時、この支援は「一人暮らしまでの準備ができたら終わり」ではあってはならず、一人暮らし開始後も利用者との繋がりを持ち続けることこそが有効な支援であると感じた。こうした背景から、コミュニティカフェを開き、居場所として機能させることが当団体の目標となっていた。

見つけた私の居場所

コミュニティカフェを開いていると、段々とそこに利用者同士の繋がりもでき始めていることが分かった。カフェ利用者の中には精神的に不安定な方もいらっしゃり、気分の波が激しい様相でカフェに来訪されることもある。そんな時に他のカフェ利用者はそうした状態の彼に対して嫌な顔をしたりせず、「今日は調子が悪そうですね」と穏やかに見守り、暖かい声掛けを利用者同士ですることができるまでになった。
スタッフとして、「利用者同士がトラブルを起こさないように」と気にかけることも多かったが、彼ら自身が彼らのコミュニティを守り、維持しようとする力があることを再認識するきっかけともなった。

取組の成果

本事業では、コミュニティカフェでできたつながりを、さらに外部の社会的コミュニティへつなぐべく、地域のお祭りやボランティア活動にカフェ利用者とともに参加することを試みた。しかし、カフェ利用者にとって大きな輪の中へ入っていくことへの抵抗は依然として大きく、十分に地域社会とつながるまでには至らなかった。そこには、前科を抱えていることによる後ろめたさや、地域に根付けなかった経験の積み重ねといった背景があることに気づいた。そこで、彼らのペースを尊重し、まずは現在のコミュニティでの関係性を深めることに注力した。今後、どのような形で地域コミュニティにつながれるか、改めて検討していきたい。

団体概要

団体名	特定非営利活動法人　風の家
代表者	理事長　淺田慎太郎
設立年月	2011年12月
住所	広島県広島市中区舟入本町17-8
ホームページ	http://kazenoie.jp/wp/
メッセージ	今後とも風の家を応援くだされば幸いです。どうぞよろしくお願いします。

取組の様子

来訪された皆さんでクロスワードパズルを解く様子

こども・若者、地域まるごとサスティナビリティプログラムの開発

一般社団法人
UMEプロジェクト

広島県尾道市

取組のかたち

単一の支援にとどまらず、「食」「学び」「移動」「居場所」を組み合わせることで、地域住民が自然に関わり合い、支援が必要となる前段階でつながる環境づくりを重視

届けたい人たち

地域の中で孤立しやすいこども・若者
一人暮らし高齢者、高齢者世帯
外出や移動に不安を抱える高齢者
地域で支援に関わる住民、ボランティア、支援者

私たちの軌跡

一般社団法人UMEプロジェクトは、広島県尾道市において、空き家を活用した多世代の居場所づくりを拠点に、こどもから高齢者までが地域の中でつながり続けられる仕組みづくりを目的として活動してきた。
地域住民、大学生ボランティア、区長会（自治会）、民生委員、地区社会福祉協議会、大学等の多様な主体と連携しながら、孤独・孤立の予防に資する取組を継続的に展開している。
日常生活圏域における小さな変化や困りごとに早期に気づき、制度的支援が必要となる前段階でつながる「予防的な地域支援モデル」の構築を目指してきた。

私たちの新たな取組

本事業では、これまでの居場所運営や支援活動の実績を基盤に、地域単位での包括的な見守り体制の強化を図った。民生委員、自治会長、地区社会福祉協議会、大学、NPO等による協議体を形成し、定期的な情報共有やセミナーを通じて、地域課題に対する共通理解の醸成を進めた。
特に、個人情報の観点から支援が届きにくい世帯に対しては、民生委員や自治会と連携したアウトリーチ型の関わりを行い、必要に応じて社会福祉協議会の相談窓口につなぐ役割を担った。

この取組が生まれた“はじまりの物語”

地域で活動を続ける中で、表面化しにくい孤独や孤立、困りごとが、こどもから高齢者まで幅広い世代に存在していることを実感してきました。不登校や発達に特性を抱えるこどもを育てる家庭、高齢期を迎えた親と同居する中高年世代、いわゆる「8050問題」に直面する世帯など、制度や専門支援につながる前段階での悩みや不安が、地域の中に埋もれている現状があった。
こうした課題に対し、福祉制度だけに依存するのではなく、日常的な居場所や顔の見える関係性の中で、早期に気づき、支え合える地域の仕組みが必要であると考え、本取組を開始した。

成功のカギとなった工夫とひらめき

本取組の特徴は、支援対象を限定せず、多世代が自然に集まる場を設けた点にある。
居場所やこども食堂といった日常的な関わりの中で、小さな変化や困りごとに気づくことができ、専門機関につなぐ前段階での相談対応が可能となった。
また、協議体の中心メンバーを民生委員や自治会長とすることで、地域に根差した信頼関係を活かしつつ、役割分担を明確にした連携体制を構築した。
話しづらい内容については社会福祉協議会の相談窓口を案内するなど、無理のない支援導線を整えた。

取組の成果

町内全戸約1,200世帯を対象とした「つながりづくりマップ」を作成・配布。また、発達特性を抱えるこどもや不登校のこどもを持つ保護者からの相談が増加し、養育不安への助言や学校との調整支援を行うことで、孤立しがちな家庭への支援体制を構築することができた。さらに、8050問題に関連する相談についても、社会福祉協議会の「くらしサポートセンター」につなぐなど、副次的な支援効果も確認されている。
つながりワーカー養成講座の開催：年3回、延べ150名参加
小地域ネットワークセミナーの開催：年4回、延べ200名参加

団体概要

団体名	一般社団法人　UMEプロジェクト
代表者	髙橋　真理子
設立年月	2022年10月
住所	広島県尾道市浦崎町　2191番地
ホームページ	https://umeproject.jimdofree.com/
メッセージ	「私が動く、誰かと繋がる。その一歩をここから」をスローガンに活動に取り組んでいます。

取組の様子

若者がつくる孤独や孤立のないまちづくり

特定非営利活動法人
山口せわやきネットワーク

山口県萩市

取組のかたち

居場所づくり
支え合いのためのつながりづくり

届けたい人たち

こども・若者

私たちの軌跡

山口市市民活動支援センターの委託運営を設立当初から実施し、社会活動に取り組む人材の育成を図っている。2016年より「こども明日花プロジェクト」を立ち上げ、困難を抱える子どもや家庭を応援する学習会や居場所づくりを毎週実施。2019年度から山口県の委託を受けて、山口県内のこども食堂の普及促進を図る中間支援団体として活動。2022年6月萩市に本事業実施拠点となる子ども第三の居場所「Waku② BASE」を開設。学習会やこども食堂、常設の居場所を実施している。また、地域の大人や、自分の好きや得意に出会う機会として様々な体験機会を創出し、地域で子どもを見守る拠点を目指している。

私たちの新たな取組

自分や大切な誰かのために「居場所」を探し、つくろうとする方のために「居場所」について一緒に考え、一緒に学び、一緒につくることを目的とした「ポーズプロジェクト」を立ち上げ、下記の事業などを実施した。
①ユースカフェ：毎週金曜日16:00～19:00で開催。友達との勉強やスタッフとのおしゃべりを目的に高校生や大学生が利用。②居場所をつくる人講座：県内、県外のユースセンターを訪問し、事業内容や若者との関わり方などを伺った。また、孤独孤立や居場所づくりに取り組んでこられた湯浅誠氏を招き、若者主体の居場所づくりについて参加者で考える講座を開催した。

“来る人”から“関わる人”へ

居場所を必要としている若者だからこそ、当事者の気持ちをより理解している。そのため、一緒に取り組むことでより安心安全な居場所づくりができると考え、居場所の利用者自身も参加できるように、「居場所をつくる人講座」を設計した。
講座の中でも、発言や考える機会を積極的につくったり、それに対してスタッフから勇気づけるよう意識して関わりを保つことで、若者を、居場所に“来る人”から“関わる人”へと成長できる機会を創出した。

取組の成果

取組の成果は、「金曜日が待ち遠しかった」や「ここは気軽に相談できる」などと若者が思える居場所をつくることができた。また、様々な居場所の見学や実践者の話を聞くことを通して、各人の「居場所」の定義が広がり、いままで居場所がないと感じていた若者も、実はいくつも居場所を持っていたことを自覚することができた。
今後の目標は、ユースカフェなどを開き、若者のために居場所づくりに取り組みたい。また、居場所を必要としている若者自身も、別の誰かの居場所づくりに関われるように、一緒に学び、考える機会を創出したい。

団体概要

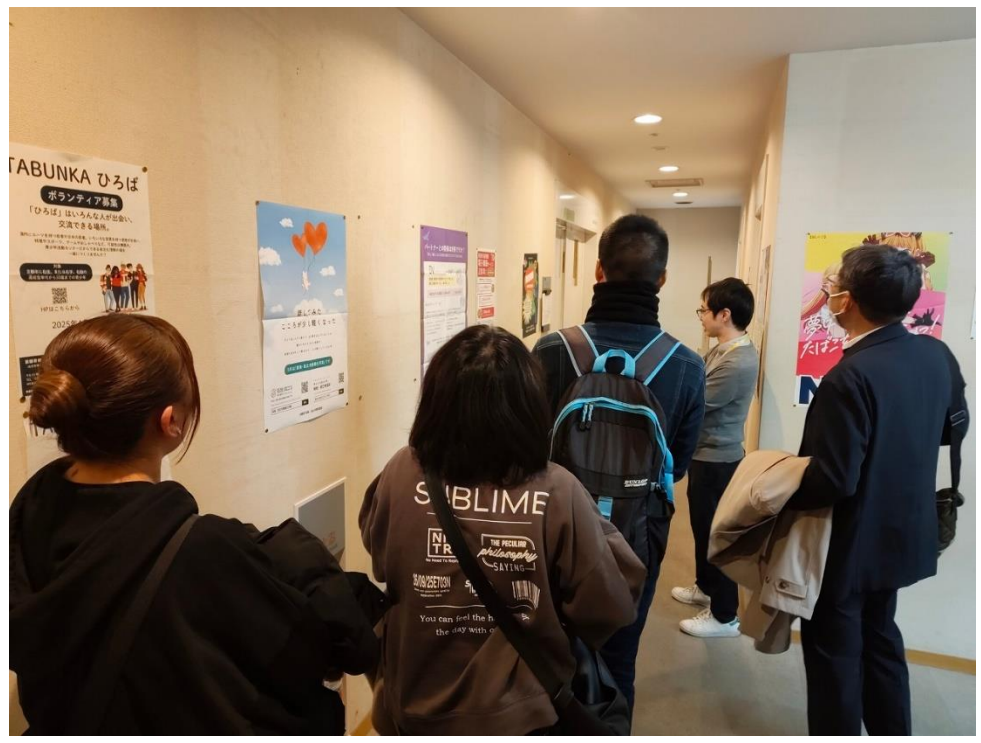
団体名	特定非営利活動法人 山口せわやきネットワーク
代表者	児玉　頼幸
設立年月	2003年6月
住所	山口県山口市富田原町４－45　なのはなハウス
ホームページ	https://asuhana.org
メッセージ	安心して自己表現できる居場所を、必要な人に届けることはもちろん、その居場所をつくることができる、もしくは誰かの居場所になれる人材を育てていくことも同時に大切だと感じます。一緒にがんばりましょう。

取組の様子

◆ ユースカフェでの利用者同士の交流の様子

◆「居場所」を考えるワークショップの様子

◆ 居場所をつくる人講座の様子



「こどもとつながるアグリ」ハートフル市民農園

一般社団法人
徳島県就業支援機構

徳島県徳島市

取組のかたち

野菜作りを通した「豊かな地域づくり」

届けたい人たち

地域住民、こども、若者、
子育て中のママ、パパ、シニア

私たちの軌跡

わたしたちは、多様な生き方、多様な働き方を許容する時代において、生きがいのある「くらし」とやりがいのある「働く」をデザインしている。

- ハートフル市民農園：市民農園の貸し出し、交流、居場所づくり
- FRセンター：臨床心理士等による相談支援事業。働く人たちの孤独孤立の予防、不登校・ひきこもり支援
- 人権YouTubeチャンネルの運営

私たちの新たな取組

昨年度から行っているハートフル市民農園を今年度も継続し、農園を介して仲間を作り居場所となるよう取り組んだ。また、今年度は新たに「こどもとつながる」をテーマに事業を展開した。
通常の農地の貸し出しや農作業の支援のほか農業教室など交流の場の創出に加えて、農園で取れた作物をこども食堂6か所へ提供した。農地を二畝借りてくださったこども食堂もあり、こどもたちとの交流が盛んになってきている。
近隣児童館のこどもたちと、農園で芋ほり、冬野菜の種まき体験等交流イベントを開催した。

最初の一歩はこんなところから

縮小していた法人事業を、昨年度再スタートさせるにあたり、休耕田と地域のつながりの希薄化が社会課題として取り上げられた。理事長の「市民農園したらどうだろうか」というアイデアをもとに、休耕田持ち主と事務局で知恵を出し合い準備が始まった。日本各地で農福連携の取り組みは進められているが、市民全般を対象に、ゆるやかなつながりづくりをめざして活動を展開した。そんな中、こども食堂が財源の課題を抱えている現状があり、更に、「地域の中のこどもの数が減り、地域の中で子どもと繋がる場所がどんどん減っている」という課題を受け、今年度はこどもとのつながりに重点を置き取り組みを始めた。

継続は力なり

1年目は、農園から遠方の登録者や体調が悪くなりなかなか農園にいらっしゃれない方等、「作物は実っているけれど、収穫が追い付かない」という状況があった。2年目、利用者の獲得が危惧されたが、Instagramやホームページで活動紹介を続けたり、関係機関との連携会議でのチラシの配布、地元新聞への掲載等、地道な広報活動を行ったことにより、今年度は登録者のお友達や連携団体のこども食堂の登録、「ホームページをみました」「新聞を見ました」等、登録に至る経路は増加し、若い世代の方の登録もあった。つながりのある方々に助けられ、そして細々と地道な広報活動が少しずつ芽吹いた印象である。

取組の成果

貸畝数：13畝（うち、今年度4月新規5畝、9月新規4畝）、こども食堂の取り組みとして畝を利用してくださったところもある。月に1度、農業教室を実施。みかん収穫ボランティア、新春ぜんざい交流会、収穫祭等の交流イベントを実施。農地利用者実人数：55名（うち児童館：21名）。 野菜提供こども食堂：6か所、近隣住民のボランティアも2名増。利用者アンケートでは、「こども食堂の方々と一緒に活動できてよかった」という感想があった。Instagramを見て、すでに次年度の申し込みもきている。今後は、農園事業をベースに、地域の中で月に1度の交流事業を実施し地域の中のつながりづくりを拡充したいと考えている。

団体概要

団体名	一般社団法人　徳島県就業支援機構
代表者	理事長　三橋　松男
設立年月	2009年4月
住所	徳島県徳島市昭和町3丁目35-2
ホームページ	http://sienkikou.com/
メッセージ	あなたもわたしも、こどももおとなも、どんな人も生きがいのある暮らしを！

取組の様子

伝統文化と季節のイベントを通じた多世代交流機会の提供

NPO法人
ミュージックサポートネットワークぱぴぷぺぽ

香川県観音寺市

取組のかたち

イベントをきっかけとした交流と居場所つくり

届けたい人たち

不登校・ひきこもり・ひとり親家庭や障害者など
社会からの疎外感を感じているすべての人

私たちの軌跡

子ども、高齢者、障害のある方への音楽療法による支援と、学校に行き渋る子どもへの学習支援や様々な体験を行う居場所の運営をしている。同時に困難を抱えたひとり親家庭等への食事支援などを行い見守りや相談会を実施し、少しでも負担を軽くする活動をしている。
子どもの伝統文化体験講座では、子どもたちが伝統文化を体験することで生きる力を学んでいる。おばけの学校、デイキャンプ、ハロウィンなど季節の行事を通して人と人がつながり安心していられる場所になっている。

私たちの新たな取組

孤立感のある人が社会とつながるために、地域のボランティアや担い手にご協力いただき、毎月1回地域食堂と季節のイベントを行った。（8月：おばけ屋敷と夏祭り、9月：お月見茶会、10月：ハロウィン、11月：ドラムサークルとシャボン玉大会、12月：薪割り火起こしお餅つき大会）
イベントは対象者と一般の参加者を巻き込み、交流し、安心できる場所となること、対象者が次のステップに進むきっかけとなること、ボランティアに興味を持てるようになることを目的に企画した。

世代をこえた交流を生み出す仕掛け

人とのつながり、居場所に来てもらうことを第一に考え、誰でもどの世代でも参加できるよう、世代や属性を超えたつながりができるイベントを企画した。例えば、伝統文化や季節の行事では高齢者の知恵や英知が子どもたちにも伝わり、それぞれの得意分野で協力いただくことで多世代間で新たな交流ができるよう配慮した。子ども中心のイベントでは地域食堂を同時に開催し、おいしいものを食べて自然と皆の笑顔があふれるよう配慮した。また今まで連携がとれていなかった地域の青年団に、地域食堂での出店や駐車場の誘導などで協力いただき、力仕事や大人にしかできない役割を担ってもらうことで、新たなつながりができた。

取組の成果

支援の対象者を特別扱いすることなく、すべての人を包括的に巻き込んで楽しめるイベントを行うことで、新たな人間関係や居場所を提供することができた。イベントがきっかけで支援対象者から支援する側になる人もおり、支援される側・する側という垣根を越えてボランティアとしての活動を希望したり、同じような悩みを抱えている人をイベントに誘うようになった。またお餅つき大会での薪割りや火起こし、野外での食事は災害時にも役立つ訓練につながることがわかったため、今後もイベントにとり入れたい。
本事業で新しく関係づくりができた地域の人たちとの交流を活かし、居場所づくりを続けていきたい。

団体概要

団体名	NPO法人ミュージックサポートネットワークぱぴぷぺぽ
代表者	理事長　大喜多　惠子
設立年月	2011年6月
住所	香川県観音寺市粟井町　1192－2
ホームページ	http://ぱぴぷぺぽhouse.net
メッセージ	誰もが安心して自分らしくいられる居場所を作ることを目指しています！

取組の様子

宇和島市と連携した孤立リスク層の発見と支援を両立する地域見守りプロジェクト

特定非営利活動法人
U.grandmaJapan

愛媛県宇和島市

取組のかたち

食を通じたつながりつくり、居場所づくり
支えあいのための人材育成
アウトリーチ型支援の推進
官民連携プラットフォーム構築

届けたい人たち

ひきこもり傾向にある方
行政やNPOの支援が届かない孤立リスク層
50代、60代の男性を中心にした高齢層
ひとり親世帯および子育て世代

私たちの軌跡

弊社団体は宇和島市が設立した「孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム」の一員として、主に食支援を通じた活動を展開してきた。ひとり親世帯や子どもを中心に多世代が集える子ども食堂を運営し地域住民が孤立しないための居場所づくりを継続的に行っている。
また、行政からの要請に応じた緊急の食支援対応も随時実施している。

私たちの新たな取組

「宇和島市と連携した孤立リスク層の発見と支援を両立する地域の見守りプロジェクト」を実施している。

- 食支援アウトリーチの拡充：行政と連携し支援が届いていない孤立リスク層へ食を媒介にアプローチ
- 見守り人材育成：地域住民や支援団体向けに困りごとを察知し、支援機構につなぐ研修を実施
- 新たな居場所「メンズシェッド」の創出：特に孤立しやすい50代～60代男性等を対象に、農作業や木工やものづくりを通じた技能継承と交流の場「つながる畑とまちのシェッド」を整備・運営

この取組が生まれた“はじまりの物語”

宇和島市内には日常生活に不安を感じながら支援を受けていない層が約3000人存在すると推測されている。既存の食支援だけでは網羅しきれない「隠れた孤立」の早期発見と、複雑化する前の予防策が急務であるという認識を市と共有したことが本プロジェクトの起点となった。
プロジェクトの実施体制は、宇和島市福祉課・こども家庭課・保護課・社会福祉協議会・宇和島市子ども食堂連絡協議会と連携しており、密に連携を取り合いながらプロジェクトを進めている。

成功のカギとなった工夫とひらめき

市からの食糧支援要請を起点にLINEグループを活用して迅速に対応し、必要に応じて専門の相談窓口へ橋わたしをおこなうなど、官民が互いに足りない部分を補完し合う体制を構築している。このような連携により、官民とNPOの強固な連携体制が築けている。
このような連携があったからこそ、「つながる畑とまちのシェッド」の運営を開始できた。農作業や木工作業での「役割」や「技能」を介した交流を行っている。12月には拠点整備が完了し、1月よりものづくりが始まった。技能継承を通じ地域に貢献できる場を整え自然な形の孤立防止をめざしている。

取組の成果

主な成果として、「メンズシェッド」の拠点を整備完了（12月28日）し活動基盤を構築したこと、「しゅくだいプログラム」により地域の見守り人材育成を開始したこと、市役所経由の食支援を通じ、ひきこもり層の定期的な食の支援とアプローチが進んでいることが挙げられる。
今後の目標として、「メンズシェッド」を本格的に稼働させていく。50代から60代、特に男性を中心に、孤立リスク層が地域社会で新たな役割を持ちいきいきと活動し続けられる環境を構築する。また、畑に実際にモノを植えることで食を通じた支援にもつながる。

団体概要

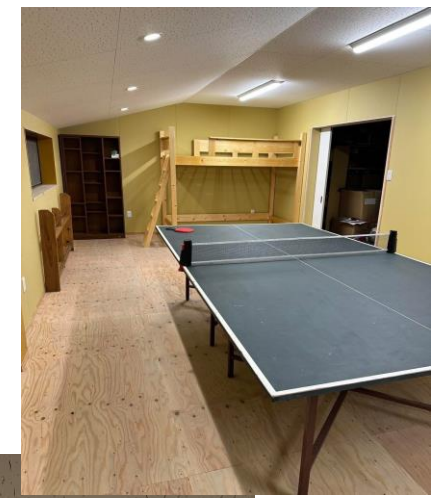
団体名	特定非営利活動法人U.grandmaJapan
代表者	松島　陽子
設立年月	2018年7月
住所	愛媛県宇和島市桝形町2丁目1番8号
ホームページ	http://u-grandma.jp
メッセージ	食を媒介とした小さな気づきが地域全体の大きな支えにつながります。 誰もが孤立を感じることなく役割をもって暮らせる宇和島を目指しています！

取組の様子

◆ イベントのチラシ

◆ 活動の様子

◆ 居場所の様子



認知症、健康相談、地域のつながり

特定非営利活動法人
くじら

愛媛県八幡浜市

取組のかたち

認知症カフェ等を通した居場所づくり
多文化共生を目指した地域づくり
地域のつながりつくり
要支援者の防災活動

届けたい人たち

高齢者・中高年者（介護・福祉等制度の対象となる方、そうでない方いずれも）
地域在住の外国人労働者
地域住民

私たちの軌跡

認知症や健康への不安、障がいや国籍の違い等により地域とのつながりが希薄になりがちな人々を対象に、安心して地域の人々と関われる場づくりに取り組んできた。具体的な活動として、認知症カフェや健康啓発を通じて医療・介護・福祉制度につながる前段階にある人が「話しても話さなくてもよい居場所」の継続的提供や、障がいのある子どものスポーツを通じた社会参加の促進、外国人労働者と地域住民の交流による相互理解の深化等がある。これらの事業を通して、障がいの有無や国籍にかかわらず、すべての人が尊重され、役割をもって社会に参画できる共生社会の実現を目指している。

私たちの新たな取組

認知症・健康相談の観点では、従来の認知症カフェや健康啓発の枠組みを発展させ、介護・福祉制度につながる前段階にある孤独・孤立状態の人を主な対象とした。1対1・短時間・非継続的な関わりでも良い場を提供し、賛同企業の協力を得て、クラフト制作やオリジナルエプロンの導入などを試行した。
地域のつながりの観点では、外国人労働者を対象とした防災教育活動および「優しい日本語」講習を実施した。防災、災害情報を正しく理解できないことは、命や安全に直結する深刻な問題となる。理解しやすい形での教育・啓発を行うとともに、日本語を学ぶことで平時の地域コミュニケーションの円滑化も目指した。

この取組が生まれた“はじまりの物語”

認知症・健康相談の観点では、地方の医療機関での勤務経験を通じ、認知症等を抱えながらも制度につながる前段階で不安や孤独を抱える人々の存在を身近に感じてきた。「困っている」と言語化できず、支援にも結びつかないまま孤立が深まる状況を踏まえ、制度の入口ではなく、日常の中で安心して立ち止まれる場の必要性を感じたことが取組の出発点である。地域のつながりの観点では、外国人労働者との交流や防災に関する不安の声をきっかけに、災害時に外国人を地域でどう支えるかという課題意識が生じた。日本人と外国人が平時から共に学び、考える場づくりの必要性が本取組につながっている。

取組の成果

認知症カフェ等を通した居場所づくりを通じて、孤独・孤立や健康不安を抱えながらも既存制度では把握されにくい層が一定数存在することを改めて確認した。短時間・非継続的な関わりや雑談を通じて、日常生活が維持できている人からも不安や困りごとが自然に発信され、「支援や介入を目的としない前段階の関係性づくり」の有効性が示唆された。また、多文化共生を目指した地域づくりを通して、外国人が日本の文化に触れることで日本や地域への関心がより一層高まり、地域の一員として行事や活動に参加しやすくなったと言える。今後は、現時点でまだ地域との関わりの少ない方にも活動を知ってもらうことを目指していく。

団体概要

団体名	特定非営利活動法人　くじら
代表者	中川　智也
設立年月	2022年8月
住所	愛媛県八幡浜市五反田1番耕地106番地　3階
ホームページ	なし
メッセージ	障がい者や外国人の方も一緒に活動しています。小さな町ですが、すべての人にとって安全で住みやすい場所になるよう地域の様々な機関と連携して活動しています。

取組の様子

認知症・健康啓発の場

防災ウォーキング

日本語・日本文化を学ぶ

「チーム里親」による子育て困難家庭への支援プログラム開発

特定非営利活動法人
SOS子どもの村JAPAN

福岡県福岡市

取組のかたち

里親さんとの協働による
新たな子育て支援プログラムの開発
子育て支援についての
当事者アンケート/ヒアリング調査の実施

届けたい人たち

子育てに困難を抱えた家庭
子育てを支えたいと思う里親家庭

私たちの軌跡

2010年　里親家庭のコミュニティ「子どもの村福岡」設立。
　　里親養育と里親支援を推進する拠点を開設。
2013年　福岡市より委託を受け、児童家庭支援センター「SOS子どもの村」を開設。
　　地域の子どもと家族への支援を開始する。子どもショートステイ事業の開始。
2014年　校区里親開拓事業（現 里親ショートステイ事業）を福岡市西区で開始。
2022年　福岡市全市で里親ショートステイ事業を開始。

私たちの新たな取組

子どもショートステイを里親家庭で受け入れる「里親ショートステイ」をさらに発展させ、コアとなる里親を中心とした里親によるチームをつくり、地域の中で「チーム里親」が行う新たな家族支援のプログラムを開発する。
当事者である子育て中の親や里親への調査を行い、「里親ショートステイ」の有効性を明らかにするとともに、「里親ショートステイ」が当事者視点に立ったプログラムとなるよう調査結果をプログラム開発に活かしていく。

この取組が生まれた“はじまりの物語”

この取り組みは、「子どもショートステイ」の受入先でもある『子どもの村福岡』に届いた子育て中の親の悲痛な声からはじまった。「この子を叩きそうです」「一刻も早く子どもと離れたいです」など、子育てに限界を感じ、ショートステイを利用したいと助けを求める多くの親の存在を知りながら、福岡市ではショートステイの受皿が足りず、その声に応えることができない現状にあった。福岡市は里親が多い自治体であり、里親が自宅でショートステイを受入れることができれば、子育てに困難を抱えた家庭の子どもも、地域の中でみんなで養育する新しい仕組みにつながると考えた。

共に進む仲間を作るための工夫

ショートステイを受ける里親を探すために、地域との窓口となる行政担当者（区子育て支援課）と連携し、里親制度やショートステイ里親について啓発する「里親って？カフェ」や個別説明会を毎月開催している。
関心のある方がすぐに情報を得ることができる機会をつくり、ウェブサイトでもわかりやすく情報を伝える工夫をしている。
さらに、ショートステイ里親として経験のある方に呼びかけ、「チーム里親」を結成し、チームメンバー同士がお互いの家庭状況や得意領域を知り、相談し合える仲間となるようチームビルディングを行った。

取組の成果

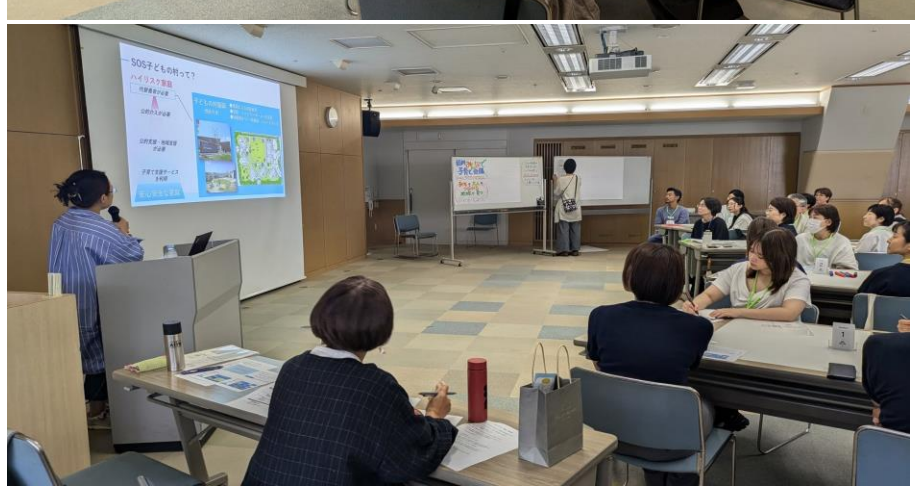
月に1回チームメンバーが集まる「つながるサロン」を開催し、チームビルディングを行った結果、スムーズなショートステイ調整が可能になるだけでなく、里親同士が相談し合い、支え合う関係構築ができた。
アンケート調査を実施し、里親ショートステイの意義や利点を確認し、「子どもひとり一人に丁寧に対応してもらって子どもが喜ぶ」「一緒に養育してくれる人がいることの心強さ」などが里親ショートステイの良さとしてあげられた。
チーム里親：11世帯、チームによるショートステイ試行（25年11月～26年1月）：16日（のべ6件、3家族）

団体概要

団体名	特定非営利活動法人 SOS子どもの村JAPAN
代表者	理事長　福重淳一郎
設立年月	2006年12月
住所	福岡県福岡市中央区赤坂1-3-14　3F
ホームページ	http://sosjapan.org
メッセージ	全国に里親ショートステイの仕組みができ、みんなで子育てを分け合う地域支援の輪が広がっていきますように。

取組の様子

右）チーム里親の「つながるサロン」



左）福岡みんなで子育てカイギ

多様な主体でつくり上げるローカルメディアとゆるやかなつながりづくり

くまがはた研究所

福岡県嘉麻市

取組のかたち

居場所づくり

届けたい人たち

多世代

私たちの軌跡

弊団体は、3年前に姉妹で、生まれ故郷である嘉麻市熊ヶ畑（くまがはた）地域へUターンしたことをきっかけに、地域内で発行する新聞づくりやSNS発信、または地域内でフリー麦茶（茶話会）や展示会等、気軽に立ち寄れるイベントを通じた顔の見える関係性づくりを行ってきた。世界中のあらゆる情報が入ってくるのに、近隣の情報が入ってこないのはおかしい、地域でいろんなおもしろいコトがおこっているのに、うまくその情報が流通していないのはもったいなさすぎるという想いで始めた。課題先進地域ではあるものの、たのしい・おもしろいを起点とした住民自治を促す活動をしている。

私たちの新たな取組

地域の中でゆるやかなつながりをつくり、精神的、物理的な孤独を防ぐことを目的に、家に引きこもりがちな高齢者や会社と家の行き来のみになっている現役世代に地域情報を届けながら、直接顔を合わせるイベント等の機会をもつくることで、高齢者から放課後に居場所のない子どもたちまで多世代にわたる居場所づくりを行った。具体的には、これまで行ってきた新聞づくりを発展させ、制作から配達まで地域の方に携わってもらいながら実施したり、小学生に企画してもらったお茶会を開催するなど、地域のみなさんを主体にしながら、情報発信、イベント主催などを実施した。

人と人、世代と世代をつなぐ工夫

人と人、それも多世代にわたって無理やりつなげようとすると、人はなかなかつながってくれない。多世代交流しましょうといっても、なかなか交流にならない。そのような過去の学びから工夫した点は、つなげることや交流することを看板に掲げずに、いかに地域の人たちが興味をもってくれそうなテーマで地域情報が発信できたり、イベントを実施できるかだと考えた。
今回であれば、新聞制作や、写真展の写真など、何気なく雑談が始まるきっかけとなるツールを活用しながら、自然なつながりづくりができる環境を整えたことが工夫といえる。

取組の成果

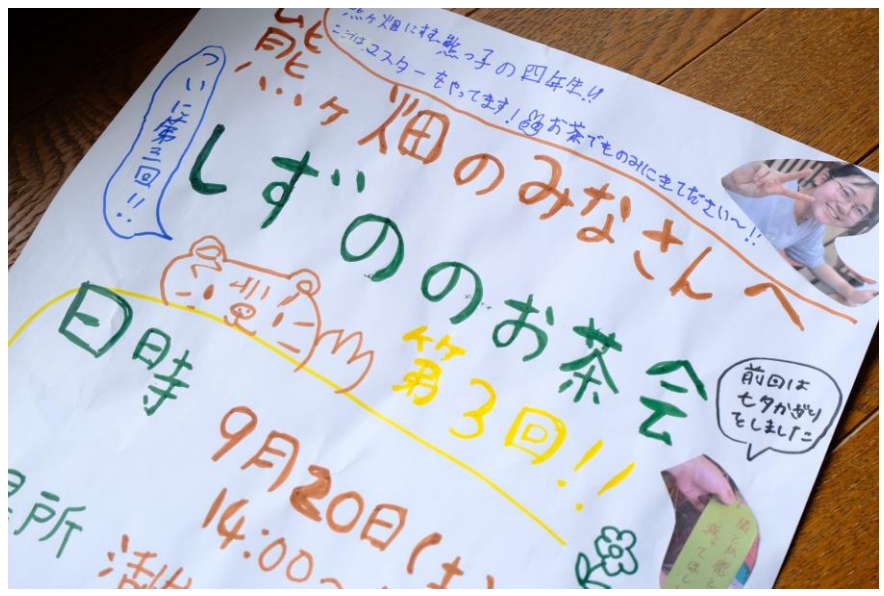
頻度よく情報発信とイベント開催を継続できたことで、住民の中でも地域のことに対する情報のアンテナが立ってきており、新聞制作に関わりたいという人や、そのほかの地域活動への積極的な参加が見られるようになった。
さらに、地域の老人会との連携がとれた結果、老人会が発行する広報誌の発行数も増加傾向になってきており、地域全体の情報流通が促されてきている実感が大きい。

団体概要

団体名	くまがはた研究所
代表者	大里 みずき
設立年月	2023年9月
住所	福岡県嘉麻市熊ヶ畑　2090-11
ホームページ	https://www.instagram.com/kumagahata gram/
メッセージ	ぜひ一度、熊ヶ畑にお越しください！お待ちしています！

取組の様子

▼小学生が企画したお茶会。幅広い年代が集まった中には、モノづくりが得意な地域の方も。みんなでワイワイ。



▼放課後の居場所づくりと地域の活動を組み合わせた取り組み。

◀自然に老若男女が集える機会としての写真展を開催。普段は地域活動に出てきづらい現役世代とも繋がれる場になった。

▼地域新聞づくりは地域の皆さんにも手伝ってもらいながら、編集会議を重ねて出来上がった。